清水邦夫

ぼくらが非情の大河をくだる時

清水邦夫

ぼくらが非情の大河をくだる時

新潮社版

ぼくらが非情の大河をくだる時

1974年2月15日発行／1974年8月10日3刷
著　者／清水邦夫
発行者／佐藤亮一
発行所／新潮社／〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部(03)266-5111／編集部(03)266-5411　振替／東京808
印　刷／二光印刷株式会社　製本所／植木製本所
定価　750円

© 1974, Kunio Shimizu, Printed in Japan
(乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。)

《目次》

鴉よ、おれたちは弾丸をこめる　3
いとしいとしのぶーたれ乞食　61
ぼくらは生れ変わった木の葉のように　95
ぼくらが非情の大河をくだる時　133
泣かないのか？　泣かないのか一九七三年のために？　185
*
後記　244
上演目録　246

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鴉よ、おれたちは弾丸をこめる

一幕四場

〔登場人物〕

女歌手
青年A
青年B
鴉婆
虎婆
かいせん婆
はげ婆
とむらい婆
いわく婆
ばくだん婆
三味線婆
おぼこ婆
すがめ婆

絶叫婆
ノーパン婆
どもり婆
そうじ婆
おっぱい婆
さみだれ婆

裁判長
検事
弁護人
書記官
判事1
〃2

裁判所所長
女1(証人)
〃2(〃)
看守1(廷吏)
〃2
〃3
〃4
幕前の観客1
〃2
〃3
〃4
〃5
〃6

幕前の観客7
〃8
〃9

1

きらびやかな河のようなチャリティーショーの舞台で女歌手がうたい出す。

鴉よ
今日も火の空をとんで
恥で
くろく身を染めたからだを
燃える
街の炎で焦す
鴉よ
今日も街の戦場で

くろく
身を横たえる無名戦士を
燃える
街の炎で葬う
鴉よ
おお　おれたちの愛
鴉よ
おお　おれたちの死
鴉よ
おお　おれたちの日々
鴉よ……

いきなり女歌手めがけて、手製爆弾が投げつけられる。
女歌手、けげんそうに拾う。
「キャッ！　ばくだん」
あわてて投げ捨てる。
群衆の一人、思わず受けとめてしまう。
あわててほうる。爆弾、まるでドッヂボールのように群衆の間をまわされる。
と、それがいつのまにか逆に奪い合いとなって、その群れが舞台の前へなだれ込んでいく。
その中から、青年Aと青年Bがまるでラグビーのように爆弾をパスしながら舞台へかけのぼっていく。

唖然として追うのをやめる群衆。
それでも青年A、B、夢中になって舞台でパスしながら走りまわる。と、パスが失敗。
手製爆弾、舞台下手奥へころころころがりこんでいく。
青年二人、ぎょっとして立ちすくむ。

青年A　かんにんして！
青年B　おばあーちゃーん！

なんの音もしない。
二人、ホッとして握手。
その時、轟音！
劇場の一部がくずれ落ちる。
停電。
闇の中へどっと死体らしきものがふってきた。

2

黒い河のような道。

大きな提灯が一つ。
鴉婆登場。

鴉婆　天の川　人の世も灯に美しき……（鼻をくんくんさせ）天の川　塩素酸カリ臭うかな……（首をふって）更けゆくや　爆弾はじける天の川……（更に首をふって）荒海や　佐渡によこたふ天の川。

その時、提灯の群れ四つ。
「もし」
鴉婆、妙にしなっとして、

鴉婆　まあ、なにやらとってもサビのある低音。まさか、あたしが恋するあの人じゃ……困った、どうしよう、ああ、あたしに永遠の美しさがあったら、生きず、滅びず、増さず、減さず、またこの点では美しいが、あの点では醜いというのではなく、或る時は美しいが、或る時は醜いというのでもなく、ここでは美しいが、あそこでは醜いというのでもなく……

提灯の一つが近づく。
「何、いってんだよ、鴉婆ぁ」

鴉婆　おや、そういうおまえはかいせん婆ぁ。
かいせん婆　とら、はげ、ばくだん、とむらい、いわく婆ぁ、みんなそろってるよ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はげ婆、しゃしゃり出て、

はげ婆　ああ、あたしに永遠の美しさがあったら。ある時には美しいが、ある時には醜いというのでもなく、ここでは美しいが、あそこでは醜いというのでもなく。

いわく婆　よしなったら、使用後のお岩みたいな顔して。

はげ婆　そりゃ、どういう意味よ。え、あんた、わかる？　とむらい婆ぁ。

とむらい婆　いいから、いいから、早くしないととむらいに遅れるよ。

かいせん婆　とむらいじゃないったら。

とむらい婆　三回忌。

かいせん婆　ヒッチハイクにいくんだろ、あたしたち。

いわく婆　もっとカッコ良くいえないかねぇ、いわく、日本感情旅行。

鴉婆　野の原には花を求めて、村々には祭を求めて。

ばくだん婆　町にはばくだんを投げつける。

鴉婆　ああ、お前さんたちと一緒だと、あたしのロマンチシズムもだいなし。

いわく婆　八十歳のロマンチシズム。

はげ婆　気に入らないね、そういういい方。あたしたちぁ、たとえ足腰曲って。

かいせん婆　毛が抜けても。

はげ婆　真実生きて。

とむらい婆　死んでいく。

一同、出かけようとする。

鴉婆　あれ、一人足りない。
いわく婆　酒のにおいが全然。
かいせん婆　虎婆ぁだ。
とむらい婆　さては途中でくたばったか。
はげ婆　およし、縁起でもない。きっと孫のお守りだよ。
かいせん婆　孫？　二十歳もすぎた孫をどうやってお守りするんだい。
いわく婆　いいじゃないの、あんなよっぱらい。
はげ婆　なにをいってるんだい。あたしたちのレンタイって、そんなものなの。
鴉婆　人がレンタイを疑うとき、それはレンタイへの疑いなのか、レンタイの技巧への疑いなのか。

提灯が一つ駈けてくる。虎婆だ。

かいせん婆　ぷーんとアルコールの臭い!?
とむらい婆　虎婆ぁだよ。
虎婆　水、水。
はげ婆　またものみすぎ。
虎婆　裟婆に残りし父母は、追善作善のつとめなく、ただあけくれの歎きには、むごや悲しや
ふびんやと……われは海の子、しらなみの……

かいせん婆　あれ、また発作。
ばくだん婆　脳梅ってのはしまつにおえないわね。

二人、殴る。虎婆、はっと我に返る。

虎婆　鴉婆ぁ、あんたの孫とあたしの孫が一大事。
とむらい婆　さてはくたばったか。
虎婆　とっつかまったんだよ。
鴉婆　とっつかまった!?
かいせん婆　二十過ぎの孫が!?
はげ婆　こうしちゃいられないよ。すぐさま奪い返すんだ。
いわく婆　レンタイの技巧への疑いはなしにして。
かいせん婆　レッツ・ゴー!

小柄の鴉婆をはげ婆、小脇にかかえて風のように去っていく。

虎婆　待ってよ、待って!　どこへいくんだい!

提灯の群れ、舞い戻ってくる。

はげ婆　あっちだ、あっちだ!

提灯の群れ、風のように去る。

提灯の群れ、舞い戻る。

はげ婆　こっちだ、こっちだ！

提灯の群れ、風のように去る。
提灯の群れ、舞い戻る。

かいせん婆　あっちのようだが、こっちだ！

提灯の群れ、風のように去る。
虎婆、四合ビンを出して飲みながら、

虎婆　ああ……こうやっているうちに月日は流れ……

提灯の群れ、舞い戻る。
一同、へなへなと倒れる。

とむらい婆　ひとこと、ひとことたずねてもいいかい。
虎婆　いいともさ。
とむらい婆　いったい誰にとっつかまったんだい。
虎婆　（絶望して）ああ……月日は流れ……わたしゃ残る。

3

重い運河のような法廷。
裁判長、木槌をたたき、

裁判長　静粛に静粛に。検事つづけなさい。
検事　（頷いて）かんにんして！　おばあちゃん！　と被告が叫んだところから推測いたします
と……
弁護人　おばあちゃんではなくして、おかあさんのまちがいではないですか。
検事　いや、目撃者の証言によれば、はっきりおばあちゃんと叫んだと申しており、ふつうこのような場合、おかあさんもしくはおとうさんと叫ぶのが普通でして、それがおばあちゃんと叫んだことに異常なショックをうけたと証人は申しております。また検察側として重視したいのは、おばあちゃんの前に叫んだ、かんにんして！　という言葉であります。かんにんして。これは許してくれという言葉と同義語で、とっさに罪の意識から発せられたものに他ならなく、つまりはその直前にそのような行為があったことを明白にしています。よって……

弁護人　裁判長。
裁判長　弁護人。
弁護人　いま検事は、かんにんしてという言葉の裏には罪の意識があるようにいわれましたが、すべてがそうだとはいい切れません。ことに女性の場合、たんなる拒否の意味で、つまり、およしになって、やめて、というような時に……
検事　被告は男性です。しかも二十三歳の青年だ。
弁護人　男性だから使わないというのですか。それはおかしい。顕著な例をいえば、ゲイボーイなどは……
検事　ばかばかしい、よしなさい、おじさん。
弁護人　しかし幸四郎……

裁判長、木槌をたたく。

裁判長　法廷でプライベートな呼称はつつしむように。

被告席から青年A、Bが立ち上る。

青年A　裁判長、発言を求めます！
裁判長　あとで発言の機会をあたえる。
青年A　おじさんたあ、なんだよぉ。
青年B　検事と国選弁護人の関係をもっと明らかに……
裁判長　発言をやめなさい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com